

第 15 回 IUPAC 化学熱力学国際会議

第 15 回 IUPAC 化学熱力学国際会議が 1998 年 7 月 26 日から 8 月 1 日にかけて、ポルトガル北部にある都市ポルトのポルト大学理学部で開催された。責任者はリベイロ・ダ・シルバ教授であった。参加者は 40 ヶ国から約 370 名ほどあり、日本からは 32 名が参加した。これは国別参加者数で第三位に当たる。会議はロッシェニ講演、特別講演、一般講演から構成され、さらに一般講演は 7 つのセクション、2 つのシンポジア、2 つのワークショップから成っていた。発表は口頭、ポスター、ラウンドテーブルの 3 つの形式で行われた。会議の規模は、前回の大阪で行われた会議に比べると、参加者数が約 6 割とややこじんまりとした感があったが、内容に関しては非常にバラエティーに富んだものであった。ただ残念なことに、多くの研究発表は液体や溶液に関するもので、しかも温度範囲が室温付近に集中していた。我々が行っているような、固体の低温熱物性に関する研究発表はあまり見られなかった。この分野の研究発表に対して、もう少しこ入れされる必要性を感じた。

この国際会議が開催されたポルトはポルトガル第二の都市で、ポートワインで有名である。歴史に関してはリスボンよりも古く、日本で言うところ、ポルトが大阪で、リスボンが東京ということになるだろうか。住民感情も大阪人に近く、リスボンに対してかなりの対抗意識を持っているようであった。しかし国全体としてはのんびりとしていて、それが会議にも反映されていたのであろうか、良く言えばかなり簡素化されていた。あるポーランドの研究者が「2 年前の大阪での会議はとても良かったが、今回の会議は…」と筆者に語りかけてきた。2 年前の日本での国際会議が非常に評判が良かったことがわかって、ある意味では非常に喜ばしく思ったが、同時に、本来の国際会議のスタイルとしては、今回のポルトでの会議のスタイルがむしろ理想的なのではないのか、とも思った。

ポルトガルでは、夏にはサマータイムが採用されていて、現地の人々は老若男女を問わず、真夜中まで遊び回っていた。しかし翌朝になると、ちゃんと時間通りに仕事を始めていたのには大変驚かされた。研究者についても同じことが言えて、ヨーロッパ圏の人々はバイタリティーあふれている人々ばかりで、活発な議論があちらこちらで飛び交っていた。それに対して、日本の研究者はおとなしく、あまり目立たない存在のように見受けられた。2 年後にカナダのハリファックス開催される会議では、日本の研究者がもう少し目立つことができるようにしたいものである。

(宮崎裕司)